

〈英語〉

基礎的・基本的なスピーキング力を身につける指導法の工夫 —— 子音とリズムに配慮した言語活動を通して（第2学年） ——

沖縄県立向陽高等学校教諭 国 吉 直 紀

I テーマ設定の理由

急速な情報技術革新とグローバル化が進む現代において、共通言語としての英語の重要性は増すばかりである。我が国においては、企業の生産拠点の海外移設や人口減少に伴う海外労働力の利用等の課題を抱えている。さらに、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを成功に導くにも、引き続き国全体の英語力を高める必要がある。

平成21年に告示された高等学校学習指導要領（以下「指導要領」と略す）の主な改善事項の一つとして、「言語活動の充実」があげられる。外国語科は、言語に関する技能の習得を目的としている科目であり、その目標はコミュニケーション能力の育成である。

その改訂を受け、生徒によるコミュニケーション活動中心の授業改善に努めた。そのことで講義形式の授業は減った。生徒の英語使用機会は増え、全体の前でパフォーマンスをする生徒たちやそれを見る生徒たちも楽しそうに活動に参加していた。本校は毎年10名前後の留学生を輩出し、基地内高校や海外姉妹校との交流をはじめとする各種国際交流活動も盛んである。元々学力が高く、外国語学習に積極的な生徒たちは授業でも活発に取り組んでいる。しかしホームステイ等実際の英語使用場面においては、自身の英語力不足を口にする生徒も多く、量、質ともに、教師が授業の成果から期待する発話には達していない。

その原因を二つに集約すると、一つは、日本語を共通母語に持つ学習者間では、お互いの英語に含まれる特徴や間違いを理解しており、言語以外のコミュニケーションを支える文化面も共有しているということである。もう一つは、発話への意欲を削ぐことを気にしすぎるあまり、教師が生徒の発音を訂正する場面もあまりないということである。

指導要領には、言語活動を効果的に行うために指導する配慮事項として「リズムやイントネーション等の英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさ等に注意しながら聞いたり話したりすること」とある。World Englishes（国際諸英語）という考え方から、日本人の英語発音に関しても寛容な意見が多くなってきた。しかし、世界中で話されている種々の英語において、l, r, th, v, 等の発音はかなり共通している。さらに意味伝達においては発音よりも重要とされる英語のリズム、イントネーションは、日本語とは大きく異なる。英語ネイティブ・スピーカー（以下、NSと記す）は各種母語の音声特徴を含んだ諸英語に対する理解能力が高いが、将来生徒が英語を使う際、NSよりも英語を第二言語として学んだ相手とのコミュニケーションが多く想定され、相互に誤解が生まれる場面も増える恐れがある。そうすると、話者にはより明瞭な発音と高い伝達能力が求められる。

英語教師の責任は、生徒にパフォーマンスさせることではなく、生徒の英語力を伸ばすことである。そして生徒に身につけてほしい英語力は、生徒自身英語を使ってコミュニケーションを行う際に直面する困難を乗り越える助けとなるものでなくてはならない。生徒たちが将来迎える厳しい国際競争と国際共生が求められる社会においては、日本語の音声特徴を用いて話される英語では、生徒たちが直面するであろう局面を打開することができるか不安が残る。

高等学校学習指導要領解説英語編に、「基礎的・基本的な知識や技能の習熟に資するものから段階的に指導することが大切である。」とあるように、今回の研究を通し、基礎的・基本的なスピーキング力、生徒たちが一生懸命準備して伝えたいと思った事柄や共有したい思いを、存分に伝えられる発話技能を身につけさせたい。正確さか流暢さかを議論する前に、その両方の土台を確立する必要があり、その土台となり得るのは、言語の本質である音声と捉えているからである。その強固な足場の上では、リスニングを始め、リーディングやライティングといった能力も伸びると期待する。そして何よりも、自分の発音に自信を持つことで、より積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が身につくと考える。

そこで本研究では、日本語母語話者が注意して学ばなければならない英語の子音の発音、英語特有のリズムやイントネーションとその指導法を言語活動に取り入れることで、より相手に理解されやすい英語を話すことができる生徒を育てることができると考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

言語活動において、英語の子音、リズム指導の充実を図ることで、英語の音声的特徴を含んだ、基礎的・基本的なスピーキング力を身につけさせることができるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 基礎的・基本的なスピーキング力とは

高等学校の指導は、中学校における学習の基礎の上に成り立つ。中学校においてはスピーキング力の中核となる音声について、「現代の標準的な発音」「語と語の連結による音変化」「語、句、文における基本的な強勢」「文における基本的なイントネーション」「文における基本的な区切り」の5項目を指導している。その素地を作る小学校学習指導要領解説外国語活動編には、「日本語のミルク (mi-ru-ku) は3音節であるが、英語の milk は1音節である。これを日本語のようなリズムで発音すると、英語に聞こえず、意味も伝わらない。」とある。また、「例えば brother という単語を聞いたり、発音したりすることにより、児童は日本語にない /r/ や /ð/ の音に触れたり、慣れ親しんだりすることになる。」と述べられている。現場における教師の意識として、発音指導の大切さを認識してはいるが、授業進度を維持しながらのコミュニケーション活動、教科書の内容理解、語彙指導、文法指導等を優先させ、なかなか発音指導の時間を確保することができない現状がある。発音練習の際は丁寧に指導し、その他の場面においても、生徒の発する英語に対するフィードバックを適切に行う発音の指導法だけでなく、授業全体の組み立てを見直す必要がある。そして生徒たちには、基礎的・基本的なスピーキング力となる聞き手を意識したコミュニケーションに対する態度と、それを可能にする技術を身につけさせる。

2 日本人の使う国際共通語としての英語とは

近年、公用語や外国語として世界中で様々な英語が話されている現状から、World Englishes (国際諸英語) という考え方がある。そのことに関連させ「日本人のカタカナ英語でも通じればよい」とする声をよく耳にする。しかし、その「カタカナ英語」が「通じる」のは、相手が日本語母語話者でない場合、聞き手は本来の英語とは異なる音をいったん受け入れ、その会話が行われている場や文脈、相手の表情等といったコミュニケーション方略を駆使し、何とか英語の近い音を連想して当てはめるといった作業が、瞬時にうまくいった場合に、話し手の意図を理解する。これは相手に余分な負担をかけるばかりか、その成否の大部分を聞き手にゆだねることになる。それはコミュニケーション上好ましくない状況である。生徒たちがそのような不便を解消することができる英語力を身につけさせることが、学校教育の目標である。したがってカタカナ英語を容認するのではなく、国際共通語として英語を使用する日本人は、NS のような完璧な英語の発音でなくとも、聞き手を尊重し、明瞭な発音で伝わりやすく話そうとする姿勢が求められる。

3 明瞭な発音とは

「伝わりやすさ」の判断はコミュニケーションの場や話し手、聞き手の能力に応じてそれぞれ異なる。NS の発話が常に聞き取りやすいとは限らない。文部科学省の第2期教育振興基本計画において、高等学校卒業段階で50%が英検準2級程度～2級程度以上達成との成果指標が示された。この指標はヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) レベルでいう B1 である。音素の把握 B1 レベルの能力は「時には外国語訛りが目立ったり、発音を間違えることもあるが、大体においてよく理解できるくらい明瞭である」と記述されている。

文部科学省が行った「英語教育改善のための英語力調査」において、話すことの技能を測るために音読を課している。そこで、単語を正しく発音できているか、意味のまとまりを理解して音読できているかを測定し、学習指導要領における「適切な発音、リズム、イントネーション、速度、声の大きさを英語を話すことができる」かどうかの力を見ている。本研究の仮説検証においても、明瞭な発音の判定として上記の方法と規準の一部を使用する。

4 日本語と英語の音声の特徴や違いとは

(1) 英語の母音と子音について

中学校学習指導要領解説外国語編では、「母音や子音の種類や数が英語と日本語では異なっていること、また、(中略) 日本語と英語の音声の特徴や違いに十分留意する必要がある。」とある。英語の母音、子音は日本語よりも数が多く、子音の有声化、無声化等、普段生徒が日本語を話しているときには意識していない部分に目を向けさせる必要がある。そして、l、r、th、f、v、等は元来日本語にはないうえに、厳密に言えば違う言語なのだから英語の音を日本語の平仮名や片仮名で表記することには限界がある。だからといって発音記号を使って完璧な NS の英語音を目指すのではなく、正しく発音できないとコミュニケーションに支障のある音から段階的に指導する。NS の英語にも生活地域等によって訛りがあるが、それらは母音の発音の違いから生じている。つまり、意味伝達上、子音の果たす役割は母音のものよりも大きい。O'connor (1980) は「母音が不完全であっても理解を妨げないが、子音が不完全なら誤解を生む大きな恐れがある」としており、音声指導は子音から始めた方がよいと主張している。子音は舌や歯、唇等によって呼気の調節が必要なことから、説明しやすく、音のみに頼る場合よりも習得が容易である。その中から、高校生が英語を発音する際、頻繁に日本語で代用し、コミュニケーションを阻害する要因となり得る音として、l、r、th、f、v、を本研究の対象音とする。

(2) 子音の連続・連結・脱落・同化について

street を片仮名で表記すると、「ストリート」となり、「su, to, rī, -, to」とそれぞれ/s/, /t/, /r/の後ろに母音を挿入する。そう発音すると、str と子音が「連続」する1音節のstreet が5音節の語に聞こえ、聞き手の理解を妨げる。さらに、日本語では「ん」以外語尾に子音がこないため、語尾でもよく母音が挿入される。単語のアクセント指導は頻繁に行われているが、音節に関する指導が不足している。加えて、子音で終わった単語の次の語が母音で始まる際、an apple が「アン アップル」ではなく「ア ナップル」に聞こえるような音の「連結」が起こる。あるいは、似た音質の子音が続く場合、want to を「ワント トゥ」ではなく「ワン トゥ」のように片方を発音しない「脱落」が起こる。また、have to や did you がそれぞれ、「ハフ トゥ」、「ディ ジュウ」のように聞こえる「同化」も起こる。これらの現象が合わさり、強勢の間隔を一定に保とうとする英語独特のリズムが生まれる。一音節ごとにはっきりと話す日本語と同じような感覚で発音してしまうと、英語の音とはかけ離れたものになり、理解しづらくなる。鈴木博（2006）は、同じ英文を日本人とNSに読ませ、コンピュータで両者のリズムを入れ替え、どちらが英語らしく聞こえたかの実験を通し、「個々の音が正確でリズム、ストレス、イントネーションが日本語的であるよりも、個々の音が日本語的であってもリズム、ストレス、イントネーションが英語的である方が英語として理解され易い」とする。

5 子音とリズムに配慮した言語活動とは

(1) スピーキングへの橋渡しとしての音読

英語を外国語として学ぶ高校生の英語インプット不足を補い、スピーキングへの橋渡しとして、音読は英語の授業には欠かせない活動となっている。単に発音練習やリスニング能力向上に効果があるだけでなく、脳科学の面からもその効果は広く知られている。しかし、単調になりがちで、黙読よりもはるかに労力を要することから、生徒からの評判は分かれるところである。音読の能力が高い生徒は、質疑応答や意見陳述といったある程度即興で話す能力においても、その他の聞く、読む、書くといった領域でも高い得点を得たという結果が、文部科学省が行った「平成27年度 英語教育改善のための英語力調査事業報告書（高等学校）」の中で示された。それは、音読の評価規準である「明瞭で自然な発音、リズム、イントネーション、速度、声の大きさ」等の基礎的能力の重要性を示している。田尻悟朗（2015）は「教師が“Repeat after me.”と言って間違った発音やアクセント、ストレス等をリピートさせると負の遺産相続の開始」と教師自身のトレーニングを前提とし、音読に関する手法を数多く紹介している。それらを適宜取り入れながら、音読の前に目的とモデルを明示し、活動中は生徒の発音に耳を澄ませ、活動後はその目的が達成されたかどうかの評価を行う。

(2) 英語らしいリズムを身につけるチャンツ

一定のリズムや音楽のビートに合わせ、英語の特徴である強勢拍を等間隔に置き、単語、フレーズ、文を繰り返して発話する練習方法である。チャンツに対しては、子どものリズム遊びという印象を持たれることも多いが、川井一枝（2015）は大学生以上を対象とした研究結果から「単語を一語一語発音する、また子音連結時には母音を挿入してしまう、弱音節を弱く早く発話することが苦手な日本人学習者にとってチャンツはよい練習法」「学習者の英語学習に対する興味や動機づけを高めた」「楽しい気分で反復練習ができる」等の効果を報告している。こういった特性を活かし、各パートの重要文法事項を含む文章をチャンツで指導することにより、文法指導と言語活動をつなげる工夫を行う。

(3) 即時評価を行うスピーキングテストとしてのグルグル

生徒間における練習内容の確認と評価を、授業中、頻繁に行う方法として、グルグルがある（図1）。静哲人（2009）は「生徒を大きな輪の形に並ばせ、教員がその内側をグルグルと歩き回りながら、ひとりひとり何らかの『パフォーマンス』をさせてその出来を評価してゆくメソッドのこと」としている。スピーキングテストを学期に一回、あるいは単元ごとに行っても、生徒に常に自分の持つ最高の技能を発揮しようと意識させるには決して十分な回数とは言えない。生徒に何か英語で発話させたなら、その英語をもっとよくするためのフィードバックを与えることが教師の役割である。緊張感を持って個人練習に取り組みながら、何度もテストを受けることが出来るこの活動を取り入れる。

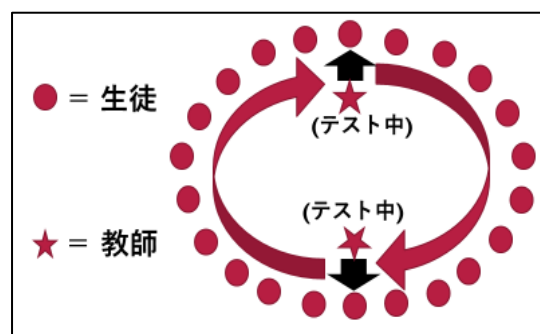


図1 「グルグル」活動のイメージ

(4) ペア活動の利点と弱点

英語が話せる生徒を育てることを目的とした授業の善し悪しは、授業中にどれだけ生徒が英語を話したか、にかかっている。講義形式の授業では、生徒の発話量が確保できない。その改善策として、ペアでの言語活動

を授業の中心に据える。スポーツを例にとってみても、技能習得のためには反復練習が欠かせない。発音は唇や舌といった調音器官の運動を伴うので、自然に行うことができるようになるためには繰り返しの練習が必要である。だが生徒は、ある発音ができないから練習しているので、教師の指導がなければペア活動中に間違っただけの発音を繰り返して身につけてしまう恐れがある。教師がすべてのペアを同時に監督することはできないということが、ペア活動の弱点である。そのためペア活動に入る前に、活動中に目標とすべき音を一斉授業の形で全員に伝え、活動中はなるべく多くのペアを観察、指導し、複数のペアで同じ間違いがあれば適宜全体へ注意を促し、活動後は目標が達成されたか確認する。このように、ペア活動を一斉授業で挟むサンドイッチ型の授業構成で、ペア活動の弱点を補う。

(5) 日本語ネイティブスピーカーの英語発音練習

ペア活動中、あるいは個人練習中において、生徒が自身の発音と目標とする音との違いを認識し、その差を近づける作業を行うことが出来ると、授業の効率は上がる。自己発音モニタリングについて小林翔（2014）は、「繰り返し自分の発音を聞くことで、正確に発音する力をつけることができることが分かった。また、自分の発音の誤りに気がつき、注意していれば修正もできることが分かった。」とし、継続的な発音モニタリングの効果を示した。モデルを示しながらの音読や、教師と生徒の一对一の英語によるやりとりを行う際は、あるターゲット音を正確に発音できる生徒でも、文章が初見であったり、本文を暗唱しなければならなかったり、言い終わるまでの時間制限を定めたりする等、発音に向ける注意を減らす要素が加わると、また誤った発音に戻ることがある。調音法が自動化されるまで根気よく繰り返す必要があるが、ある音が発音できない生徒は、その音を聞き分けられないので、自分の発音が正しいかの判定ができない。その補助として、英語の子音をトレーニングする時には日本語の母音と組み合わせる、という練習方法を取り入れる。そうすることにより、学習者が母語として使っている日本語の中に、部分的に英語が配置され、その部分の英語らしさをより明確に学習者が意識することができる。さらに、英語の母音と子音を別々に練習できるので学習者の負担も少ない。例えば ran の発音では、/r/、/æ/、/n/、が個別に発音できない生徒にとってこの3つの音を続けて発音することが困難だということである。

英語発音の代表的な練習法の一つに、単語内で一音のみ異なるミニマルペア（最小対立語）を使った方法がある。ALT 主導で light と right の聞き分け等でよく使われるが、この活動を生徒間で行う。このことでターゲットとなる音のスピーキングとリスニングの両方が練習できる。

6 評価について

指導期間中3回、教科書本文の要約文約 40 語程度を音読させ、その口元をビデオ録画し、その後英語母語話者 ALT 3 名と日本語母語話者の英語教師 1 名で各自個別に評価を行う。評価規準はターゲット音（l、r、th、f、v）が適切に発音されているか、強勢の間隔を一定に保とうとする英語独特のリズムを意識した音読になっているか、とする。各発音や間の取り方が正確なら 2 点、正確ではないが理解できる範囲なら 1 点、意味が伝わらない音は 0 点を与える。生徒の音読する要約文は 3 回とも異なるが、ターゲット音の数を調節し対応する。評価に使用する要約文の音読練習は、生徒の自動化された発音力を測るため、授業の中での個別指導は行わない。

現在の高校生は、小学校から外国語活動に触れてきた世代である。その生徒たちが、これまでにどのような発音指導を受けてきたかをアンケート（図 2）によって把握し、技能面と合わせて変容が表れるか検証を行う。調音方法や英語のリズムに関する知識や、NS らしい発音やカタカナ英語に対する意識、そして英語らしい発音を冷やかされるような環境ではないか等と合わせ、生徒が発話をためらう原因として、語彙、文法、発音、あるいは話す内容等、どの部分を生徒自身が苦手に感じているか等を調査し、指導に活かす。

「英語の発音に関する意識調査」(事前)						
以下の文章について、6段階の中から、自分に当てはまるものを選んでください。 成績には反映されませんので、正直に答えてください。						
6 (全くその通り)、	5 (その通り)、	4 (どちらかといえばその通り)				
3 (どちらかといえば当てはまらない)、	2 (当てはまらない)、	1 (全く当てはまらない)				
私は英語を学習する上で、発音は大切だと思っている。	6	5	4	3	2	1
私は英語らしいリズムとはどのようなものか知識として知っている。	6	5	4	3	2	1
私は1の音 (light, hello 等の) 発音方法を知識として知っている。	6	5	4	3	2	1
私は注意しているとき、1の音 (light, hello 等の) を英語らしく発音できる。	6	5	4	3	2	1
私は注意していないときも、1の音 (light, hello 等の) を英語らしく発音できる。	6	5	4	3	2	1

図2 「英語の発音に関する意識調査」(事前)からの質問例抜粋

Ⅲ 指導の実際

1 単元名 Lesson 6 Gaudi and His Messenger

2 単元目標

- (1) 本文に使用されている語彙、文法を理解し、内容を読み取る。
- (2) 本文に使用されている英語表現 (be in poor [good] health、be to do 等) を身につける。
- (3) 本文の要約を完成し、聞き手に内容が伝わるように音読する。

3 単元の評価規準

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力 (話すこと・書くこと)	外国語理解の能力 (聞くこと・読むこと)	言語や文化についての 知識・理解
① ペア、グループ、グルグル等の言語活動に積極的に参加する。 ② 音読テストに積極的に取り組む。	① ターゲット音の調音方法を身につける。 ② 内容が伝わるよう、発音に気をつけて音読する。 ③ 要約文を完成させる。	① 意味のかたまりや音の変化を意識してモデルリディングを聞く。 ② 意味のかたまりを意識して文を区切る。	① 関係副詞の非制限用法 ② ifを使わない仮定法 ③ ガウディがサグラダ・ファミリアに込めた思い。 ④ 夢を追いかけること。

4 単元の指導と評価の計画 (全13時間)

時	学習目標	学習活動	指導上の留意点	評価の観点	評価方法
1	・要約文を音読できる。 ・発音について理解する。	・目標とする音声の調音方法について学ぶ	・ビデオ撮影 ・説明は端的に	・【関・意・態】② ・【表現】②	・活動観察 ・音読テスト
2	・パート1の語彙、文法、本文内容について理解する。	・意味のかたまりを区切る ・音読活動	・訳を介さず、英語の直読直解をめざす	・【理解】①、② ・【知・理】③	・ワークシート
3 本時1	・パート1についてペアで理解を深める。	・ペアでの内容理解と音読 ・チャンツ	・ターゲット音、リズム指導	・【関・意・態】① ・【知・理】②	・活動観察 ・グルグル
4	・パート1の内容をグループで発表できる。	・パート1の要約文作成 ・要約文の暗唱	・ターゲット音、リズム指導	・【関・意・態】① ・【表現】③	・活動観察 ・音読テスト
5	・パート1の内容を個人で、原稿なしで発表できる。	・要約文の暗唱 ・音読発表	・ビデオ撮影	・【関・意・態】② ・【表現】②	・活動観察 ・音読テスト
6	・パート2の語彙、文法、本文内容について理解する。	・意味のかたまりを区切る ・音読活動	・訳を介さず、英語の直読直解をめざす	・【理解】①、② ・【知・理】③	・ワークシート
7	・パート2についてペアで理解を深める。	・ペアでの内容理解と音読 ・チャンツ	・ターゲット音、リズム指導	・【表現】① ・【知・理】②	・活動観察 ・グルグル
8 本時2	・パート2の内容をグループで発表できる。	・パート2の要約文作成 ・要約文の暗唱	・ターゲット音、リズム指導	・【関・意・態】① ・【表現】②	・活動観察 ・音読テスト
9	・パート2の内容を個人で、原稿なしで発表できる。	・要約文の暗唱 ・音読発表	・ビデオ撮影	・【関・意・態】② ・【表現】②	・活動観察 ・音読テスト
10	・パート3の語彙、文法、本文内容について理解する。	・意味のかたまりを区切る ・音読活動	・訳を介さず、英語の直読直解をめざす	・【理解】①、② ・【知・理】①	・ワークシート
11	・パート3についてペアで理解を深める。	・ペアでの内容理解と音読 ・チャンツ	・ターゲット音、リズム指導	・【関・意・態】① ・【知・理】①	・活動観察 ・グルグル
12	・パート4の語彙、文法、本文内容について理解する。	・意味のかたまりを区切る ・音読活動	・訳を介さず、英語の直読直解をめざす	・【理解】①、② ・【知・理】④	・ワークシート
13	・パート4についてペアで理解を深める。	・ペアでの内容理解と音読 ・チャンツ	・ターゲット音、リズム指導	・【関・意・態】① ・【知・理】④	・活動観察 ・グルグル

5 本時の学習指導

(1) 本時1 (3/13:60分)

- ① 学習目標：パート1の語彙、文法、本文内容についてペアで理解を深め、ターゲット文を暗唱する。

② 評価

主な学習内容	評価基準と方法	学習活動における具体的評価基準		
		A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)
1 本文音読	ペアでモデルリーディングを再現できる。活動観察。 【関・意・態】①	ターゲット音の発音が正しく、内容が理解しやすい。	多少発音の間違いがあ るが、内容は伝わる。	発音の間違が多く、内容 が伝わらない。(個別指導)
2 チャンツ	○ターゲット文を暗唱できる。 ○グルグル。 【知・理】②	3つの仮定法の表現を 正しいリズムで暗唱で きる。	リズムにずれがあるが、 3つの仮定法の表現を 暗唱できる。	リズムがずれ、3つの仮定 法の表現も暗唱できない。 (個別指導)

③ 展開

時間	学習内容と活動		指導上の留意点	評価基準と方法
	教師	生徒		
導入 (3分)	・前時までの復習 ・本時の目標確認	・チャンツ(既習のレッスン、 各パートの重要文をリズムに 合わせて暗唱)	・英語を使う雰囲気作り	
展開1 (25分)	・モデルリーディング (ターゲット音を特に 注意して聞かせる)	・パラレル・リーディング(原 稿ありで追いかけて音読) ・シャドウイング(原稿なし で追いかけて音読)	・ペアでシャドウイングをしてい る際、練習どおりにできているか	活動観察 【関・意・態】①
展開2 (10分)	・クイックリスポンス (活動の方法を伝える。 音読で練習した音を出 すよう指示する)	・本文をチャンクに分けたシ ートを使い、生徒Aが読み 上げた日本語に合う英語を 生徒Bがすばやく答える。	・音読活動で使った音を出してい るか ・答える生徒はなるべくワークシ ートに頼らない。	
展開3 (10分)	・T・Fクイズ (本文について、選択肢 の語(句)のうち一方を 選ぶと正解の文、もう 一方を選ぶと不正解の 文になる文章を複数用 意する)	・生徒Aが選択肢のどちらか を選び、文を読み上げる。 生徒Bがそれを聞き、正解 だと思えば True と saying その文を繰り返す。不正解 だと思えば False と saying 訂正した文を言う。	・音読活動で使った音を出してい るか ・語彙や内容を理解した上で行 う。	
展開4 (10分)	・ターゲット文のチャン ツ指導 【ターゲット文】 Without Gaudi, the Sagrada Familia would be completely different from what it is today.	・モデルどおりできるよう練 習する。	・ターゲット音だけでなく、音の連 結・脱落・同化を意識させる	・グルグル 【知・理】②
まとめ (2分)	・全体に関わる注意点の 確認と指導 ・次時の予告	・本時の反省	・グルグルで時間内に合格できな かった生徒は、各自テストを受け に来よう指示	

(2) 本時2 (8/13:50分)

① 学習目標: ア パート2のターゲット文チャンツ暗唱。: イ 要約文のグループ発表。

② 評価

主な学習内容	評価基準と方法	学習活動における具体的評価基準		
		A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)
1 チャンツ	・ターゲット文を暗唱できる。 ・グルグル。 【表現】②	発音、リズムともにモデ ルを再現できる。	多少発音の間違いがあ るが、リズムは再現でき る。	発音の間違が多く、リ ズムが再現できない。 (個別指導)

2 グループによる要約文作成と発表	グループ活動に積極的に参加している。活動観察。 【関・意・態】①	担当の箇所を正しく原稿を見ないで言うことができる。	担当の箇所を正しく原稿を見て言うことができる。	担当の箇所を正しく原稿を見て言うことができない。(英文を短く言い換える。)
-------------------	-------------------------------------	---------------------------	-------------------------	---------------------------------------

③ 展開

時間	学習内容と活動		指導上の留意点	評価規準と方法
	教師	生徒		
導入 (3分)	・前時までの復習 ・本時の目標確認	・チャンツ(既習のレッスン、各パートの重要文をリズムに合わせて暗唱)	・英語を使う雰囲気作り	
展開1 (20分)	・ターゲット文のチャンツ指導と確認テスト 【ターゲット文】 As the Sagrada Familia becomes more famous it gets more donations and admission fees. Advanced technology has also increased the pace of its construction.	・モデルどおりできるよう練習し、テストを受ける。	・語彙や内容を理解の上で行う。 ・ターゲット音を正しく出しているか	・グルグル 【表現】②
展開2 (25分)	・要約文の内容確認と、正しく言えるかを個別テストで測る 【要約文】 Gaudi influenced various artists. After his death, the Sagrada Familia has continued to be built by the architects who try to imagine what Gaudi had in mind. The construction is to be completed very soon thanks to more money and advanced technologies.	・グループで要約文を完成させ、担当箇所を割り振り、暗唱の準備をする。	・ターゲット音を正しく出しているか	・グルグル 【関・意・態】①
まとめ (2分)	・全体に関わる注意点の確認と指導 ・次時の予告	・本時の反省	・グルグルで時間内に合格できなかった生徒は、各自テストを受けに来よう指示	

6 仮説の検証

本研究では、生徒の英語が World Englishes に共通する英語の音声的特徴を含んだものとなるよう、生徒の言語活動に対し、l、r、th、f、v、の子音指導とリズム指導の工夫を行った。以下、研究仮説に基づき、事前、中間、事後の評価用音読ビデオを、日本人英語教師1名、ALT3名(それぞれシンガポール、イギリス、アメリカ出身)でターゲットとなる子音が正確に発音できているかの判定を行い、その結果を分析する。合わせて、発音に関する事前・事後アンケートの変化を比較、考察する。

(1) 英語の子音、リズム指導を取り入れた言語活動の充実について

事前アンケートによると、本研究における各ターゲット音の「発音方法を知識として知っているか」という問いに対し、「全くその通り」

表1 事前・事後アンケート比較 (n = 26)

	l の発音	r の発音	th の発音	f の発音	v の発音	リズム
事前	42%	46%	50%	58%	54%	12%
事後	84%	87%	88%	84%	90%	52%

は簡略化のため、「th は舌をくんで」、「v は下唇をくんで」と伝えていたが、生徒それぞれで舌、唇、歯の使い方が統一されておらず、基礎指導の重要性を再認識した。例えば、f や v を発音する際、日本語で悔しさ等を表現する「唇をかむ」と言う慣用句に影響され、強くかむ生徒が見られる。それでは呼吸が歯と唇の間を通らず、正しい音は出ない。そしてかむ場所も、歯を唇の上からあてている場合が多く、それでは動きが大きく、不自然になる。そこで、「歯をあてる場所は唇の内側、リップクリームを塗らないところ」、「歯と唇の間を息が通っているか確認して、特に v は声で唇が震え、かゆくなる」等の説明を加えた。その他の音についても検証授業第1時において、今後の指導を徹底させるため、個々の発音の方法を示し、練習した。その際の工夫としては、日本語を活用したことをあげる。例えば l を発音する際、日本語の「ら」と「だ」の舌の位置を意識させ、そのあと l の発音に移る。日本語の「ら」は伸ばすことができないが、l や r はできるので、大げさに発音して聞かせる等した。そうすることによって、ターゲットとなる音に集中して練習できることや、生徒個人、あるいは

は生徒同士で正誤を判定できるという利点がある。その結果、事後アンケートにおける上記の質問に対する答えは、lで42ポイント、rで41ポイント、thで38ポイント、fで26ポイント、vで36ポイントの増となり、全てのターゲット音の調音法について、生徒間での共通認識を高めることができた。

検証授業第2時以降は、教科書指導を進めつつ、ターゲット音、リズムの指導を行った。その指導を行うためには、生徒が英語を話している必要がある。それは、教師の説明や解説が中心の授業では実現できない。授業時間の最低3分の2は生徒が英語を話しているよう、指導案にあるようなペア活動を多く取り入れた。本文のフレーズ訳を先に渡し、単元の初回から音読を行えるようにした(写真1)。授業中は内容理解に時間を割くのではなく、新しく学んだ語や表現を使うことを授業の目的とした。生徒の活動中は、各ペアやグループを回り、活動内容に集中し、発音への意識が薄れている箇所を注意、訂正した。



写真1 音読活動の様子

「英語らしいリズムとはどのようなものか知識として知っているか」という質問に対して、事前アンケートで「全くその通り」「その通り」と答えた生徒は、12%であった(表1)。これまでも子音の連続・連結・脱落・同化については指導してきたが、まだまだ継続して取り組む必要がある。上でも述べたとおり、個々の発音よりもリズムによって英語らしく聞こえ、聞き手の理解を助けることを生徒に理解させる必要がある。今回の検証授業ではチャンツ指導を2度行った。音楽を流しながら体を動かすので、楽しさが優先されがちであるが、原稿を暗記することで難易度を上げ、グルグルを行うことで、生徒が真剣に取り組むよう工夫した。ターゲットとなる箇所は、そのパートのキーセンテンスや、文法事項が含まれている部分を選び、内容理解や文法指導も兼ねた。本文では“Without Gaudi…”とある部分を、よく書き換えて使われる類似表現の“But for Gaudi…”とifを使った元の表現“If it were not for Gaudi…”も合わせて指導した。この方法は、分詞構文や代名詞を指導する際にも使い、教科書本文をリズムに合うよう適宜工夫を加えている。まず始めにターゲット文を板書し、強勢を置く部分に印を付け、一斉指導の後個別で練習を行った(写真2)。強勢拍の来るところで左右にステップを踏むことで、記憶を助け、個人でも練習、確認ができるよう工夫した。当初はその場の足踏みで行っていたが、全員の動きがそろわなかった。左右のステップを試してみると、教壇からもリズムのずれている生徒が見えるようになった。新しいチャンツ文導入の際は、ターゲットセンテンスを懸命に覚え、そして思い出すことにすべての注意を払っていたが、完全に暗唱出来るようになると、ペアで手をたたいたり、車いすテニスが話題のレッスンにおいてはラケットを振る動作を入れたりする等、文章の意味に合わせて異なる動きを行う余裕ができた。「音痴だから」「リズム感がないから」という生徒に対しては、「普段歩いているように2拍子で」と励ました。本時2の授業においては、練習時間を十分確保することができなかったため、チャンツを4分割し、グループでのグルグルテストを行った。全員ができて合格とするので、自分の箇所に対する責任感と、グループ内での教え合いの姿が見られた。最少で1回目、最多で4回目と違いはあるが、時間内に全グループが合格できた。その結果、事後アンケートにおいて英語らしいリズムを知っていると答えた生徒は52%で、40ポイントの上昇となり、これまであまり気にしていなかった部分を意識させることができた。

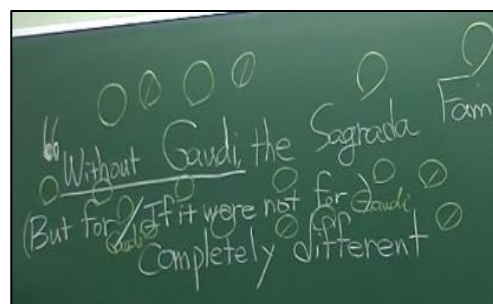


写真2 チャンツ指導の板書例

チャンツ指導は反復と継続が必要である。そのため、これまでに習得したチャンツをまとめて授業の初めに唱えている。そのことで英語の授業に臨む心と体の準備を整えながら、前時の復習を行うこともできる。また、担当箇所を生徒が決めるのではなく、直前に教師が指定するとさらに緊張感が増し、テスト時間も短縮できる。

(2) ビデオ撮影による音読評価について

撮影は事前、中間、事後と3回行った。各パートについてターゲット音が3回以上現れるよう要約文を作成し音読させた。音読の際は制限時間を設け、意味のかたまりに注意してピリオド以外で5カ所区切るよう指示した。その後評価者4名は個別で、各音素についてはAccurate: 2点、Acceptable: 1点、Poor: 0点とし、正しい箇所で区切れているかと合わせて判定を行った(図3)。生徒個人の満点が1040点のテストで、4人の合計が4160点になる。

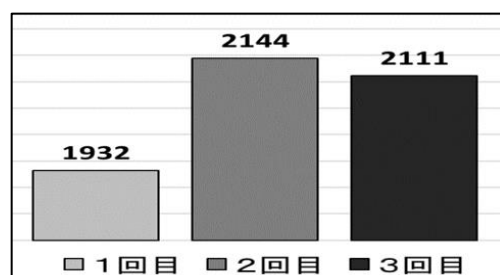


図3 クラス総合計点比較 (n = 26)

3回目は2回目から下がったが、1回目と比べると大きな改善が見られた。このことから、短期間の指導で生徒の発音を直すことが可能だが、安定して発音できるようにするためにはこの指導を継続する必要があると分かった。より正確なデータを取るためには3回とも同一の原稿で音読テストを行う方法もあるが、今回は教科書指導と平行して行ったため、学習したパートの要約文を使用した。次に各音素別で分析する(図4)。

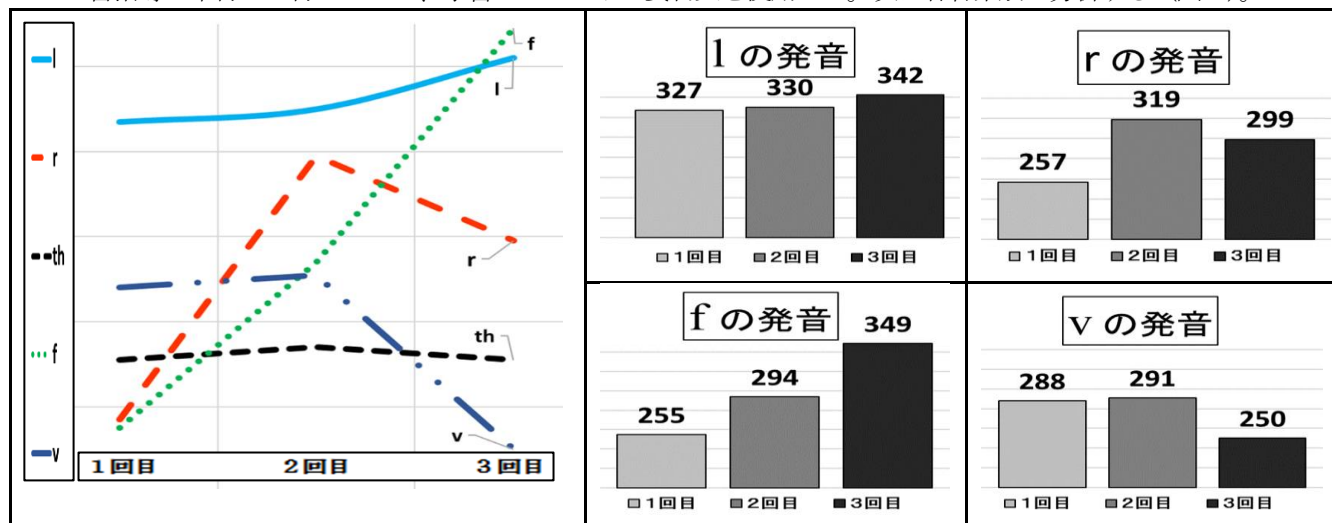


図4 各ターゲット音クラス合計点比較 (n = 26)

lは、事前アンケートの中で「調音方法を知識として知っているか」の問いに肯定的に答えた生徒の割合が最も低く、事後アンケートでは42ポイント上昇と最も変化した音素であるが、評価テストではあまり伸びていない。それに対し、rにおいてはアンケートと評価テストが同様の伸びを見せている。lとrは日本語の「ら」で代用し、この2音素の習得を苦手としている生徒は多い。しかし、今回の検証から、舌を口蓋に接触させないrと比べ、接触を伴い、より「ら」の音に近いlの習得が困難であると分かった。その原因は、舌が口蓋に触れたかどうかよりも、舌と口蓋との接触の位置を調節する方が、より細かな違いであるからではないかと考える。

thは3回の評価を通じて最も変化の少なかった音素である。2回目でわずかな改善が見られたが、3回目で元に戻るという結果が出た。さらに細かく見てみると、thの有声、無声で差が出ていることが分かった(図5)。

本検証で使用した無声のthを含む単語は、Beth, theory, healthy, death, thanksであり、有聲のthはThey, the (2回)、thanであったことから、文の中で重要な意味を持つ語を話す際には、より正しく発音しようという意識が働いたのではないかと考える。このth音の改善が難しかった原因として、英語を習い始める前から知っている「サンキュー」や英語学習初期に“this”を「ディス」、「the」を「ザ」と繰り返し発音する癖がついているからではないかと考える。母語からの転移や、訓練上の原因によって、誤用が定着してしまう化石化が起きていると思われる。

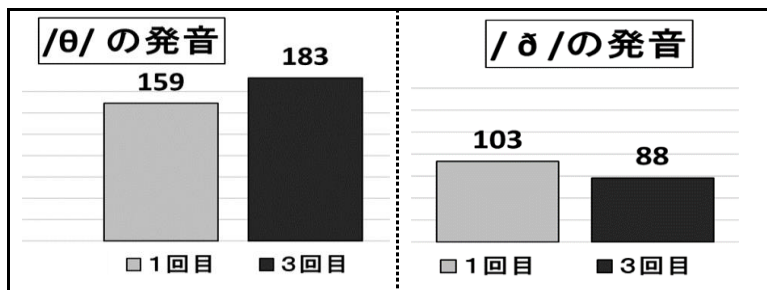


図5 thの無声音/θ/と有声音/ð/のクラス合計点比較 (n = 26)

fの発音は、今回のターゲット音の中で最も大きく改善された音である。しかし、生徒の事前アンケートで調音方法を知っていると答えた生徒も最も多かったが、第1回評価では最も得点の低い音であった。その要因として、本人が正しいと思っていた調音法の間違いを指摘することによって改善が図られたのではないかと考える。このことから、これまでの英語学習において、発音の間違いを訂正されることがなかったため、本人が間違いに気付いていない場合があると考えられる。

vの発音は、fの有声音であることから同様の結果を期待したが、そうではなかった。その原因は2つ考えられる。一つは3回目の要約文を作成する際、本文では“many”とされていた箇所を、音の登場回数をそろえるため、“various”と変えたことである。本文音読の際に練習できなかった語を正しく読みづらかったのではないだろうか。もう一つは、vの音を出す際、日本語の「ぶ」にならないよう、上下の唇を閉じないように指導したが、評価ビデオを見直すと、上の歯を下唇に当ててはいるがその離し方が強く、早すぎることから、bの音と判定されている場合が見られた。以上のことから、さらに丁寧に詳しく指導する必要があると分かった。

英文を意味のまとまりで区切って音読しているかどうかについては、1回目が高得点で、2回目、3回

目と下がった(図6)。要約文の総語数は1回目3文34語、2回目4文41語、3回目3文42語となっており、このことが文章全体の把握に影響を与えたことが考えられる。2回目の要約文は関係詞の非制限用法が使用されているのに対し、3回目では制限用法が用いられている。明かにカンマで区切られている場合と比べて、読みやすさが異なっていたことが分かる。さらに、間の取り方も個人によって異なるので、「1秒以上」や「息を吸う」

等、具体的な指示を出して統一を図る必要があったのではないかと示唆を得た。

(3) 生徒の感想について

コミュニケーション重視が叫ばれて久しく、発話の内容ではなく形式、音声を強調した指導は時代に逆行しているかもしれない。しかし、実際のコミュニケーション場面において、聞き手が話し手の発音の間違いを指摘、訂正、指導することは稀である。そうであるならば、学校の教室という場所では、生徒の発音力を伸ばす機会は得られない。そしてそれが英語教育、英語教師の役割と考え、今回の検証に望んだ。コミュニケーションにおける流ちょうさを優先させ、発話をためらわせる可能性のある発音の訂正は望ましくないとされる中、発音指導重視の授業を受けた生徒の感想を見てみる(表2)。

表2 生徒感想(抜粋)

・英文を読んだときに意識しなくても英語の発音ができるようになってとても達成感がありました。
・初めてここまでしっかりと発音の授業を受けて、今まで本当に適当だったことがわかりました。少し自分の自信にもなったし、とても楽しかったです。
・英語の発音に近づくことができ単語も覚えやすくなった。
・発音の練習も楽しかったので、英語の勉強がより好きになりました。
・毎日毎時間口の中がカラカラになった。普段舌を使っていないことがよく分かった。
・小・中のころから徹底的にやれば、みんな上手に発音できるのにな～と思いました。

生徒が話している途中でも、発音の間違いがあれば止めて、正しく言い直させた。発話を最後まで聞いて、「さっきのIがおかしい」と言われても、生徒にとって実感しにくいからである。そしてその音がどう違うのか、どうすれば正しい音が出せるのかを指摘し、訂正させた。この方法は生徒のやる気を削ぐどころか、かなり好意的に受け取られたことが、生徒の感想から窺える。生徒は、英語が話せるようになりたい、うまくなりたいと思って授業を受け、能力の向上を実感することで、達成感を得ている。正しく発音しようという意識が単語のスプリングに向けられ、発音指導は語彙の増強にも役立つと感じている生徒も見られる。普段使っていない舌の筋肉や唇の動きで話し続けることは、決して楽な授業ではない。それでも意欲的な意見が出るのは、自身の話す英語が正しい英語の音や英語らしいリズムになることを心地よいと感じたからではないかと考える。そしてそれが、外国語を話す魅力であるし、その感覚を得ることができた生徒もいると思わせる感想もある。今回の検証授業で得た知識や自信、達成感が、生徒のさらなる英語学習へ向かう意欲となることを期待する。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) ペア活動を増やし即時評価を行うことで、聞き手を意識して伝わりやすく英語を話す基礎的・基本的なスピーキング力を身につけさせることができた。
- (2) 発音の重要性を理解させ、ターゲット音の調音法を繰り返し指導することで、明瞭な発音を身につけさせることができた。
- (3) チャンツ指導を取り入れることで、強勢拍を等間隔に置いて英文を読むことができた。
- (4) 発音・リズム指導を通し達成感を与え、英語学習への動機づけを与えることができた。

2 課題

- (1) 第2回評価から第3回評価のポイントが下がった音があり、一度改善しても、その能力を定着させるためには継続した指導が必要である。
- (2) より正確な変化を把握するため、評価用スクリプト作成の研究を行う必要がある。
- (3) 出身国の異なる評価者間で大きく評価の開きがある音に関して、その原因を探ることで日本人の話す英語がどう捉えられているかを明らかにし、今後の指導に繋げる必要がある。
- (4) 音声認識ソフトやスマートフォン等の ICT 機器を利用し、より正確で効率的な発音指導の研究が必要である。

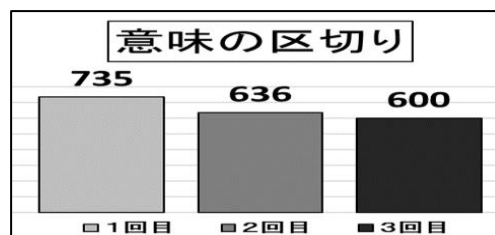


図6 クラス合計点比較 (n = 26)

〈参考文献〉

- 文部科学省 2016 『平成 27 年度 英語教育改善のための英語力調査事業(高等学校) 報告書』
- 川井一枝 2015 『英語発音指導におけるチャンツの有効性』 いわき明星大学人文学部研究紀要 第 28 号
- 田尻悟郎 2015 『英語教科書本文活用術』 教育出版
- 小林翔 2014 『生徒の自己発音モニタリングが正確な発音の定着に与える効果』 EIKEN BULLETIN vol.26
- 投野由紀夫 2014 『英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』 大修館書店
- 文部科学省 2013 『第 2 期教育振興基本計画』
- 静哲人 2009 『英語授業の心・技・体』 研究社
- 文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領』
- 文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領解説 外国語・英語編』
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』
- 鈴木博・他 2006 『日英語の比較』 三修社
- J. D. O'Conner 1980 『Better English Pronunciation』 Cambridge University Press